図書館へ

銀狼

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
図書館へ

【Ｎコード】
Ｎ８５１９Ｕ

【作者名】
銀狼

【あらすじ】
初めて掌編というもんを書いてみた。それだけ。

（前書き）

掌編という形を知って「そうか、こういうやり方もあるんか」と感心して、一回やってみよっちゅうことで。ネタから何から適当すぎるけど、まあ生暖かい目で見ていただければ幸いかと。

作成時間は2時間半かな、それでこれはないわーw↑

あ～、暑い……しかし、今日は図書館に行く日。何でか？　本を返しに行くに決まっとろうが。
一人で悪態つきながら、防犯ステッカーに「田上康平」と書かれた自転車に手を掛ける。何を隠そう、この俺が田上康平や。
家を出発して約１０分。病院の隣にある峠道をブレーキも掛けずに下っていく。もちろん、風に当たって涼みたいがため。坂が終わってもしばらくは漕がず、流れに任せる。早くタイヤが回りすぎて漕いでも意味がないから。
こっから先はちらほら家が見えてくる。町の中心ともいえるバイパスに近付くからや。そろそろスピードも落ちてきたし、チャリを漕ぎ始めようとしたその時。
「あ、康平く～ん」
……嫌な予感がしてチャリを止める。右を見てみると一件の真新しい家。その扉が開いてて、そこにいたのは……同級生の片倉由紀。
「どこ行くん？」
「……図書館やけど」
それを聞いた片倉の顔が少し嬉しそうなのはなんでやろ？
「あ～……実はあたしも図書館に行こうと思とんやけど、引っ越してきたばっかでまだ道分からへんのよ。よかったら道教えてくれへんかな～って」
どうしよう。正直……しかし、助けを求められて答えないというのは……相当微妙な顔をしているであろう自分を予想しながら答えた。
「まあ、ええけど」

……まずい、非常にまずい。元々俺は女子が苦手……なんつーか、

恥ずかしいわけやないけど、何か苦手なんよ。加えてこの状況。なぜこの俺が女子と二人きりで……何も喋らずにただチャリを押すだけの俺。乗って行ったらそりゃ早いんやけど、それやと片倉の道案内ができん。片倉がチャリに乗ってないから。片倉もチャリに乗ればええと思たんやけど、生憎彼女の妹が使ってるらしい。

何も喋らずにいるのも息苦しいんで、恐る恐る話しかけてみた。

「えっと、ところで……図書館に何の用や？」

「本を見に行こうと思って」

……そらそうや、俺はなんてアホなんや……

「康平君は？」

「借りとった本を返しに。ついでに本借りに」

「……そっか」

苦手とは言うもんの、会話できないレベルではない。話しかけられたら応答するくらいはする。男子と会話するよりも緊張の色を感じるけど。

「あ、ここ右な」

あぶね、緊張から道を外れるとこやった。なおも無言で進んでいく。セミの声がよく聞こえる。岩に染みていく静寂さとはこういうもんなんやろか。習ったばかりの句が頭をよぎる。そこに、セミ以外の声が穏やかに響いた。

「康平君ってさ……変わったよね」

……え、何言ってんのこの人は。

「……中学入って2年、変わった自覚はないけどな」

横目に見てると片倉がフッと鼻で笑ったような音が聞こえた。

「……何がおかしいねん」

「いや……あたしが言ったんはもっと前……小……2とか3とからへん」

……ああ、あのときか。

「あたし小学2年のときにこっちに引っ越して転校してきて、最初に気になったんが康平君やった」

どういう意味やろ？
「ほら、男子は野球、女子は鬼ごっこ、みたいな感じでみんな外で遊んでたでしょ、あの時。でも康平君だけ一人教室で何か読んでることが多かったじゃない？」
ああ、そういう意味か。
「まあな、あんときは色々知ることがおもろかったしなぁ。外で遊ぶよりも本読むのが楽しかった」
「へぇ～……じゃあ余計やったかな、あたしらが鬼ごっこに誘ったの」
「いや？　そんなことはなかったけど。野球より鬼ごっこの方がええと思とったんも事実やし」
「……そっか。でも、その後完全に男子側に行ったよね。女子と一切関わらんというか」
「その前の年に、相当デカい病気かかって夏休み潰したんや。そんで、流石にこのままではあかんなと、体力つけなマズイやろと。んなら、男子と野球やらサッカーやらやっといたほうがええやろって」
「そんなこと考えて遊んでたの！？　そっか、ただの遊びじゃなかったんや……」
「……そっから後、女子とは完全に接点なくなったけどな……と、着いた。図書館」
気付けば床はタイルが敷いてあり、その先には白い建物。片倉と俺はここで別れた。俺はチャリ置き場にチャリを置きに行かんと。

東口から図書館に入る。こっち側にしか自販機はない。買ったスポーツドリンクを一気飲みして、図書館の中に入った。
「こんにちは～」
受付嬢のあいさつに答えて本を渡した。後は目的の本を探す。借りる。帰る。それで終わりや。
スッスッと本棚の間を移動する。大体どこに何があるか把握して

いる。3番目の本棚の裏側。そこに行くために3番目と4番目の間の通路へと曲がっていく。すると……

『……あ』

2人同時に声を上げた。正面にいたのは片倉。やばい、真正面からまともに女子と目があったっ。慌てて本棚に目を向けた。さ～っと目を泳がせていただけだったが、目的の本を探し当てることができた。それに手を伸ばす。しかし、視界の横からも手が伸びてきて、その本の背表紙のところで自分の手と重なった。

急いで手を引っ込めた。もう一つの手も同じように引っ込んだ。……案の定、片倉やった。こっちが見ていることに気付いたのか、片倉が一瞬目を向けてきた。が、ほんの一瞬で、すぐにうつむいてしまった。顔が赤くなっているようにも見えるが……確証があるもんやない。俺は……何か、心臓音が大きくなったような気がする。

「……この本目当て？」

「う、うん……」

小さく首を縦に振った。借りて家で読もうと思ってたのになぁ……気まずさであちこち見ていた時に目に映ったのは誰も座っていないテーブル。

……片倉を見ると、俺と同じところに目を向けていた。こちらに気付いた。……片手をあげて軽く首をかしげてみた。俺がもとの姿勢に戻ってからの数秒がやけに長く感じた。その長い数秒の後、片倉は笑顔でウィンクしてきた。

そして……

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8519u/

図書館へ

2011年7月16日03時29分発行